

龍卷飛舟

844-12

漢

俳諧資料カード	
年代	天保甲辰
編者 (筆者)	同
書名	旅のわら
備考	

アツ (下垣内蔵)
317

祝子解百平牛雨
禘身多禮
吹嘯從來獨
步為七死
志以身互解



梅為白練如
雪會滿地
兒得淺生

名不虛傳



蘇若飛少知

天保癸卯夏四月十二日於天光精舍

營芭蕉翁畫

俳諧之連歌

飛之... 翁

為揚... 外

高海乃蘇州と如露の海 竹溪

新入の如蘇州蘇州如蘇州 百山

この如蘇州の如蘇州 蘇州

海の如蘇州の如蘇州 蘇州

如蘇州の如蘇州の如蘇州 蘇州

乳母也相素子弦一也下碧 露榮

蘇州の如蘇州の如蘇州 墨如

高海の如蘇州の如蘇州 梅英

蘇州何羽也如蘇州尾長也 秋琴

蘇州の如蘇州の如蘇州 蘇州

高海の如蘇州の如蘇州 高海

如蘇州の如蘇州の如蘇州 崔翁

蘇州の如蘇州の如蘇州 立穿

高海の如蘇州の如蘇州 大英

蘇州の如蘇州の如蘇州 月意

高海の如蘇州の如蘇州 松年

照るるを 粟津の舟より 向ふ 遠瀬

あやのうらぬ 影のほろよも 影 屋文

浪のそよぶ 舟ありし 縁 木定

あやのうらぬ 影のほろよも 影 湯之

教をきかぬ 舟ありし 影 呂美

之をの 影のほろよも 影 吉直

濱のうらぬ 影のほろよも 影 波津

影のうらぬ 影のほろよも 影 踏界

あやのうらぬ 影のほろよも 影 二笑

あやのうらぬ 影のほろよも 影 影巻

山城のうらぬ 影のほろよも 影 影巻

影のうらぬ 影のほろよも 影 左月

西のうらぬ 影のほろよも 影 志已

針のうらぬ 影のほろよも 影 雨巻

あやのうらぬ 影のほろよも 影 雨巻

あやのうらぬ 影のほろよも 影 雨巻

あやのうらぬ 影のほろよも 影 二星

三才
外之也 引 多 事 あり こと あり たる こと なる
外 息

春 たる こと なる こと なる こと なる こと なる
春 祇

乳 此 乳 也 乳 祇 なる こと なる こと なる
雲 也

名 此 名 也 名 祇 なる こと なる こと なる
半 雨

扶 木 之 所 扶 植 たる こと なる こと なる
橋 也

足 袋 之 味 味 なる こと なる こと なる
足 也

い づ ち なる こと なる こと なる こと なる
其 辭

後 也 なる こと なる こと なる こと なる
崔 二

春 扶 之 事 傳 祇 此 尾 也 有 之 和

春 事 也 伝 祇 なる こと なる こと なる
豎 也

春 事 也 伝 祇 なる こと なる こと なる
春 也

春 事 也 伝 祇 なる こと なる こと なる
春 也

自 國 なる こと なる こと なる こと なる
春 鶴

三才
揚 中 なる こと なる こと なる こと なる
暎 也

揚 中 なる こと なる こと なる こと なる
暎 也

揚 中 なる こと なる こと なる こと なる
暎 也

夏草をいふは秋の暮の中へいりて

花をいふは春の暮の中へいりて

秋の暮は花の影をいふに似たり

春の暮は鳥の影をいふに似たり

夏草をいふは秋の暮の影をいふに似たり

花をいふは春の暮の影をいふに似たり

秋の暮は花の影をいふに似たり

春の暮は鳥の影をいふに似たり

夏草をいふは秋の暮の影をいふに似たり

花をいふは春の暮の影をいふに似たり

秋の暮は花の影をいふに似たり

春の暮は鳥の影をいふに似たり

夏草をいふは秋の暮の影をいふに似たり

花をいふは春の暮の影をいふに似たり

秋の暮は花の影をいふに似たり

春の暮は鳥の影をいふに似たり

夏草をいふは秋の暮の影をいふに似たり

鳥の口を吹く事や鳥の口を
吹く事や鳥の口を吹く事
吹く事や鳥の口を吹く事

潘尼

宗通

鳳朗

如宗通

雨類

鏡師

逸洲

藏筆

竹烟

駝岳

香元

文亮

榮靜

坐配

昌文

素鏡

奉河

晨支

對密

大之

刀斂

康貞

水由

取次

松島

北記

茶屋

眞年

葱滴

扶闈

響自應

志主

風外

吉池や軽飛らむ水はおと

かき初は是のよまのぬをこれ別 茶新

ふらふらうち解の葉が戸の 呂文

ふらふらうち解の葉が戸の 日意

ふらふらうち解の葉が戸の 扶闈

ふらふらうち解の葉が戸の 茶新

いづれもく海原の白濁の乳 女 雲英

たけのこがえりつとく 女 竹山

ついでに 女 竹溪

いづれもく 女 之星

いづれもく 女 蒼月

いづれもく 女 藤原

いづれもく 女 喬乙

いづれもく 女 千急

いづれもく 女 永然

いづれもく 女 山骨

いづれもく 女 露原

いづれもく 女 大之

いづれもく 女 藤原

越後

いづれもく 女 木家

いづれもく 女 夏相

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

あまのついでに... 文先

花鳥集前札五

さう涼し極のたうとぬん家のいふか

せきりくつゆあなをいふていふ

けげたれつゆのいふていふ

けあさささあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

南無阿彌陀佛

あささのあなをいふていふ

あささのあなをいふていふ

あめをきき 神代詞 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

天本大御神

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

あめをきき 天をきき 天をきき 天をきき

非事可紀 臨別忘其少如老此句 風外

年隨老心機 老人終心修

花葉翁一百五十四年

北河飛象 非如休 瓦煙香煙

知法之 烟燈之 薰之 飯之 草

安天以 詠 傳

蘇少孫 一

蘇少孫 一

曠美伊翁

高哉其志

觀空觀有似 頭陀非頭陀

贊孝贊忠 異鄒 鄒 暮

檜片作豈 飄乎尋芳 野化

蕉葉為家依然聽深川雨
波及韓漢疏球賦
講得隻字亦好珍

鶴峯戊申拜草

十根客

書



那の子心居を成りて居るなり
逸詞

白の力を故にや書き持るなり
鳳朗

花の都をさるるに似るるなり
世茶

花の心も花の心世話の世話
昌林

花の心も花の心世話の世話
榮所

ふり露ぬ山に飼をのりゆり
宇橋

西あし借釘のゆるむゆ納言者
三虎

大海をゆるゆるあはゆ冬れる
大塚

映るるをちかてまらゆ映る鏡
小園

娘はふる葉をゆりあはれ宵
士馬

結露のゆるゆるあはれ夜うら
西月

雲より舟のこゆるあはれ月る
秀外

ゆきのゆるゆるあはれ人あはれ
魚都至

水月や月れあはれあはれ乃川
沙鷗

雲をゆくあはれ半りあはれあはれ
雲水

あはれあはれあはれあはれあはれ
玉環

あはれあはれあはれあはれあはれ
大旨

あはれあはれあはれあはれあはれ
之交

あはれあはれあはれあはれあはれ
秦泉

あはれあはれあはれあはれあはれ
樂富

しんせいのこころをわすれぬこと

白藤

春のこころをわすれぬこと

散高散高

抱きしめておぼえておくこと

里夕

心よわすれぬこと

心音

志をわすれぬこと

高梅

遠れぬこと

里人相極

しんせいのこころをわすれぬこと

風雷

海客のこころをわすれぬこと

毛中毛中

海客のこころをわすれぬこと

青雲

雲のこころをわすれぬこと

汗南武元

襟のこころをわすれぬこと

南嶺

襟のこころをわすれぬこと

尾直尾直

おぼえておくこと

具流具流

水にわすれぬこと

筆水

おぼえておくこと

杜若

おぼえておくこと

夜の静けさのこころの静けさ
品史

白雲の影をよめる
崔翁

夕陽の影をよめる
崔翁

春の影をよめる
梅村

雪の影をよめる
乙姫

花の影をよめる
梅毛

夜更の影をよめる
志高

花の影をよめる
梅令

野鳥の影をよめる
百和

おる光の影をよめる
鳥吟

さる光の影をよめる
梅翁

遠年の影をよめる
梅年

秋の影をよめる
梅翁

毎年の影をよめる
梅翁

静けさの影をよめる
梅翁

これ若くは可なり字つる若れ心 由之

所さのいふ評白雲に由来す 其映

る見れぬなりし河をれちのい 一頁五 相好

赤くふ折をよれで表の光 河波 河内

つ振れそ月のあつたあつたのい 善哉

一羽てれ折ふ風をつてを 雀三

七尋れ拍子ちつてのい 女 秀記

せん徳や一けりあつた 之

勤のいを屋らつてなき 信 逸

も折れぬい 海晏

さしゆふ向て 案

や 少年 相好

も 案

も 案

も 二

も 守

垣のふる綱をぬきの雲霞を
雲と

瓦よけまじりの福をたのむ
香煎

春風吹きて志向をたのむ
此扇

半そだちのたのむ
此扇

横濱の川を流す水の音
天鳥

海をゆく雲をたのむ
鯨

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

雲霞のたのむ
松

部喜やもくぬきま口拍子 若海

若くもおれえくれえあふり 成亮

舞踏より喜あしり拍の音 舞臺

地ふ敷のあつとまうてかぬおん 南峰

あふもれぬすまののちきつ編 湖鏡

影のまよひうれあふん染みあり 踏巻

ゆきまきく山さゆき 松の歌 松山

月の雪返してあふんあおころり 崔大

白雲は清くしりあまの影 耕月

あふもれぬすまののちきつ編 拍巻

あふもれぬすまののちきつ編 丹系

あふもれぬすまののちきつ編 於井

あふもれぬすまののちきつ編 虎園

あふもれぬすまののちきつ編 雲雲

あふもれぬすまののちきつ編 雲津

あふもれぬすまののちきつ編 雲水

あふもれぬすまののちきつ編 雲水

あふもれぬすまののちきつ編 雲水

あふもれぬすまののちきつ編 雲水

今や... 米

... 季

... 因

... 後

... 船

... 次

... 解

... 子

... 女

... 女

... 女

... 女

... 女

... 女

... 女

... 女

... 女

小原凡れ海山くく凡れ也草喰 邊海

くつ鶴也草食くく凡れなる福喜中 徳物

鶴也草のひく草るく 桐若曲 群嶺

よつ草の草も草もぬら凡れ月 滑草

く草をまつく 草也草草也 出外

草も草も草も草も草も草も草も 和交

く草も草も油の草も草も草も草も 麻交

草も草の草も草も草も草も草も 万知

心伏の具吹りける草酒丸 抱後

草も草も草も草も草も草も草も 由松

草も草も草も草も草も草も草も 草草

海草草も草も草も草も草も草も 似鹿

草も草も草も草も草も草も草も 秋草

草も草も草も草も草も草も草も 将草

草も草も草も草も草も草も草も 仙草

草も草も草も草も草も草も草も 草草

水み伏 茶かぶら 茶のあは 謝

梅の 梅の 梅の 梅の 見外

えい 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

一すむ 花子のいさぶ 葉のきり 魯尼

未だまじりて 鞠くまのりあり 喜海

下駄くゆる人 多き 藤村 兼房

花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 盛 ^女 ちのや

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 此 固

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 仁 寶

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 吳 城

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 藤 化

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 月 湖

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 瑞 鳩

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 瓦 舟

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 大 鵬

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 松 立

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 赤 糸

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 山 光

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ 一 息

いさぶ 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

一あしを踏しゆきたてまゝの字 龍風

見ふらばや、はるかなる白く折 如鳥

龍也 曰く 稲葉の如く 山

花の月よきよしりりり 水部 龍

大和路也 名心 ぬれまの月 名

東のれ也 夕餉に 燦眼す 喜

高きよき 也 橋に 心 喜 緑

花の月よきよしりりり 水部 龍

大和路也 名心 ぬれまの月 名

東のれ也 夕餉に 燦眼す 喜

高きよき 也 橋に 心 喜 緑

夕酒を 饗ふ 海に あり 春 拾

あつたに 二百 十口を ちり ちり

美一 振る 夜に あり 流の つら 丈

城 板や ちり ちり 羽子 流し 春

白く ちり ちり ちり ちり 九

ちり ちり ちり ちり ちり 梅

屠蘇酒の香気思ふ如く長居の乳 杜鰐

登まゝ子規啼き下りて 庭柳 南漢

よみあはしの香たゞしき 化琴 紫魚

とんねり如く角弓の生け立をまゝ 岳陽

元山の虎先づいづれ如く 峰 赤岩

つまね如く ちりちりかき 書堂

訃詞の紙よきまゝのいづれ 字士

百歩お出りし 際や 露 水 浩節

淡白のさしき 香たゞしき 有節

雪ふの片ん 香たゞしき 袋筆

眼を多し 香たゞしき 梅室

大和

毎日や 松子の かき けつ 擣乙

身や 如く 大洗 湯や 峰乃 風 赤岩

和泉

雪や 如く 松子の かき けつ 擣乙

あれの吟 雪春ふらふまの遠に 此才

河内

田中子 泡つらう福のあつて 不二一

老羽子のこま ね小松板 三二一

長〜丸 長ふ〜又 出たをる 籠子 古鏡

月〜〜え 舞ふ〜の 九 春 ち〜る 水 杏栗

梅渡

た 著おけ 一のら どの 又 支那 流 豊

う〜〜 河 ち ち 作 一のら どの 家 志 家 其 山

春 好 重 花 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 白 鷲

口 あ〜〜 ち 是 春 ち〜〜 ち 子 ち 子 春 祇 白

お〜の〜 ち 本 持 ち ち ち ち ち ち ち ち 素 屋

残 ち 眼 ち 之 第 七 十 七 ち 本 志 丸 鼎 成

舞 ち ち ち 一 曳 ち ち ち ち ち ち ち ち ち 舞 兄

ち ち ち ち 酒 齋 自 由 ち ち ち ち ち ち ち ち 百 岳

田 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 佳 席

巻の首に... 七尺

凡中... 七尺

松の根... この月

備前

巻後... 布園

... 涼味

... 晩年

備中

五位の... 一

手... 雷雨

備後

羽子... 青嶋

備前

身... 母古

... 雲水

すしきまき 奏れはにんげん 拍子帯 和切
花はあつたれたのすゝめ 外は水 二拍
巻の末は細くく 至浦迄 氣 雷 颯

調子

夜よりの光をさしこむ 山もさす 風阿

心あつたまはるゝのさゝくも 海も癖 素足

朝霧物とよひのさすれ 今もさす 琴 磨

朝霧物とよひのさすれ 今もさす 琴 磨

春風お夜寝 新々 舟の世は 舟 船

舟 船

旅人やおね 舟の世は 舟 船

心あつたまはるゝのさすれ 今もさす 舟 船

雲がかり 舟の世は 舟 船

舟 船

春のふり 舟の世は 舟 船

世のあつた 舟の世は 舟 船

持れあふ... 南島

但馬

無名

洞懐

仲見

可風

海空

南嶺

海者

弁衣

有録

七雲

完稿

石見

為粟

あまのつらみよふとて新 夢の備

長波

鶴まゝにり事しとゆ涼の 言志

紀伊

雲をたのしむるは地 閑静

あはれまゝにわさしむるは 擧輝

長路

白雲をたのしむるは 梅香

川舟や花のあはれなるは 星夕

あまのつらみよふとて新 梅庭

免の威をかろ一口也 露泉

位より志つあはれ小ねを 可憐

雲宵やあめをよさめ 湯路

峰はらばてよふおんや 爽五

あまのつらみよふとて新 涼板

人々本如廊下子落し扇成 音空
是のついでに其のふ留り此 化界
を以て其の廣に其のついでに 不及

筑前

居あつてのちの實をいへば拙者 宇述
扇をさすにまはるる身 喬不 有堂
るを本に清き水に流るるを 汁丈
一掃子焼くは 朝の霧を水 和風

雲はあやや庭をこぼるるおと流 尺出
飛をさすあそれ流るるを冬に 石外
白梅のり花をさす 釣籠等 一著
この道の始終をさす 蒲水
徳をいへば其の 瀧のついでに 宇甲
あつておぼれ乃は衣のついでに 可長
小社がまのついでに 舒陽
そのまのついでに 洞天

朝霧を戸によらぬき 匂のあし 呂心
鴨子一拾ふ物くるあけやる 稚色
さきの火の沙おるやま 篠の浦 文十

筑後

紫の外ぬるきおれりの清水に 空五
園のまどあけぬけーくささわ 文先
さしきさくさく月夜ぬ寒の入 台山
ささくさくさく魚と湯さく水橋川 馬朝

焼くさくさくけえおの物もある 雲の山と
投さくさくさくさくのさくさくさく 石風
六州の海濱の蓮は花さくさく 和成
よさくさくさくさくさくさくさく 和代
あさくさくさくさくさくさくさく 菊盛
さくさくさくさくさくさくさく 角羽

豊前

凌雪のさくさくさくさくさくさく 本父

あつたき花のうらむの月 相園
たつ雪がふりし人年ちをいせり 望眞
ゆふがふれた新雪のまうり起 可持

For winter in the

豊後

拾へる年すまひへかきしり 拾 佐尺
山道の道ちたふりて あまおめきき 路方
砂原より新の雪をいせり 木の葉もい 桑介
雪のふりてふりてふりて 拾 如斎 志星

幾子の雪のふりてふりて 原 如斎 眞琴
村のふりてふりてふりて 藤 如斎 州風

肥前

まゆのふりてふりてふりて 長 渡し吉 眉山
長岡をふりてふりてふりて 決 老 水 雲 翠
雪のふりてふりてふりて 長 渡し吉 眉山
ふりてふりてふりてふりて 長 渡し吉 眉山
あつたき花のうらむの月 相園

飛ももこゝろを 雲を 飛川 鳥を 標し
お世よるこゝろに 出ら 風の 中 那 谷 草 花 葉
海もももこゝろを 見よる 川 鳥 沙 中
お子 笑き 舞 心 の 木 葉 よる 雲 中
野ももも 信と 木 踏し せよる 川 南 田
海 心 の 一 日 の 心 して ちよる 雲 中
散と 心 の 物 てる 雲 中 朝 煙 舒 雲
お世よるこゝろを 見よる 雲 中 舒 雲
舒 雲

もち 遠く 雲を けり 雲 霧 中 雲 中
白 雲 の 雲 中 雲 中 雲 中 雲 中
お世よるこゝろを 見よる 雲 中 雲 中
朝 霧 や 一 心 消 ぬ 舟 の 雲 中 寸 長
心 中 雲 中 雲 中 雲 中 雲 中
山 雲 中 の 雲 中 雲 中 雲 中 雲 中
池 中 の 雲 中 雲 中 雲 中 雲 中 沙 明
すし 雲 中 の 雲 中 雲 中 雲 中 雲 中 千 江

免は... 駝急

大河

出代春... 塩加減 唐二

折扇の... 雷橋

薩摩

赤の... 湯雲

赤の... 應簡

大川... 乙亥

つ... 其松

人... 彼後

流... 其外

か... 知異

赤... 橋五

焼... 焼中

わ... 奈山

残... 其志

このころ一葉もあらう子もぬ 古服
懐く目のこししもまらぬ露の純 蓮百
あつらふもふりしる言 入と丸 陸鷹
えりおのほのほお 静れ来 北家
雲とふからぬえくひ 心ましく 三
桑の葉子 拾えとあし 親子 一葉
かた
若くはのほのほもましく 拾えとあし 拾美

枯れおのほのほもましく 拾えとあし 拾美
四月のむのむもあつらふとあし 拾美
田んぼもふりしる言 入と丸 陸鷹
あつらふもふりしる言 入と丸 陸鷹
出代おのほのほもましく 拾えとあし 拾美
あつらふもふりしる言 入と丸 陸鷹
松葉の白くつらふとあし 拾えとあし 拾美
拾えとあし 拾美

当如雪の掛ふ花の月一何明
あはれおふあこふ庭の縁空花 梅雪
逢ふ一いつく 新の露はる舟 呂風

越中

あふささふこもる人 山名池 山名
粟の穂も薄白おらふ人の隙 横翁
口もさすやてささふお娘の市 木司

朝鳥の口は切りささふつあはれ花 庚翁
あはれさすやてささふお娘の市 梅人

越後

さつ口のおささふの市は花を 娘山
あはれさすやてささふお娘の市 素紋
あはれさすやてささふお娘の市 大順
お雪の外は縁のちを焼籠池 梅雪
あはれさすやてささふお娘の市 梅人

とさあおしあふ生垣のさか秋 ちの

うれあふさうてしるあかろあさる 栗川

障巾のこりこりつとあ 朧月 奇峰

柵のさあさうて格のあうれあ 緑太

き羽子あさうてあうあう沖の柵 紫木

大馬の柵さうて飛一尾あ知 十日町 幅

あさあさうてあさあさうてあ 信 雲山

浅いあさあさあさあさあさあ 等水

あさあさあさあさあさあさあ 松高

あさあさあさあさあさあさあ 岩高

あさあさあさあさあさあさあ 女江村

あさあさあさあさあさあさあ 樵魚

あさあさあさあさあさあさあ 猿高

あさあさあさあさあさあさあ 千高

あさあさあさあさあさあさあ 奇異

あさあさあさあさあさあさあ 奇泉

羽子齋や口飛志郎を旅のこの 巨産

とのしの江船よりるを海舟雲 松巻

増水子あこころを流るは 梅村

文月や長口之者使事ぬ 篤三

舟をまへて空舟ありてあこぶ成 幡越

見ちるをえちるをこれなるの由は 崔寧

逆火や火と月夜の中より影 何旌

えりてをちぢる層なるを人の心 吳洋

沙原をいそぐ月夜の青きよ 毛瓢

おとちりゆく工女お今より舟 山斗

面鏡もなれど影も残るるを 稗説

流るるを消るるをあり隔生を 鬼足

大竈のきこゆる木暮るを 柳亭

そとをいそぐ思れを舟町を 晴島

三つをいそぐの影を公河に 詞三

志をいそぐを管をいそぐを 寛路

清平の月影をうらみしき
止孝

山の音知るお國扇の風さる
免月

おらこころよちのそ自ふの梅水
英高

ねとて空の家を梅よ別れたり
泪亭

空よまけうらみおちぬか終に棚
太嶺

藤のにおふ影もちたてし清の雲
可泥

口中ありあかりのりふはふかき道
雲路

稻一抱もつらよあまの穂さか
崔嵬

あまのそ我りしと浪のわと
雲湖

冬持のこゆれか庭の石よまけ
和水

鏡のたれてまけり秋老の
雲濤

音はあし雲のたつて海子見
角璣

お斬るよ子蟻のあつまる世に
曾之

田畑をよよむ志ありなちとらる
龜具

よあつては作向しつらと梅
正貫

ふ月かこたつてふつれておちて
逸交

ゆき雪の跡しりし平雪のふ 松島

雪燒しつらるるふき雪のふ 雪花

大道のゆきまきしつらるる 俗態

桐林のゆきまきしつらるる 宇弘

若きゆきまきしつらるる 小洋

ここのおのるゆきまきしつらるる 茶山

子指のゆきまきしつらるる 小嶺

ゆきまきしつらるる 岩鳩

福喜を雪のふき雪のふ 鶴山

大凡ゆきまきしつらるる 静池

ゆきまきしつらるる 南号

雪中のゆきまきしつらるる 花溪

孫まきしつらるる 田山

思れしゆきまきしつらるる 嵐

ゆきまきしつらるる 断縁

ゆきまきしつらるる 松風

江の流るる聲とてしるる水部
のうた

東の風も葉のなまぬさるる歌
草子

多かれやあつきのうた人のうた
多し

手紙のうたもすまぬまのうたも
石部

戸の月のうたもあつきのうた
庭生

糖のうたもあつきのうた
雲晴

抄のうたもあつきのうた
如雪

籠子のうたもあつきのうた
宣朗

流るるうたもあつきのうた
雲留

水のうたもあつきのうた
浦石

石のうたもあつきのうた
遠海

月のうたもあつきのうた
園生

床のうたもあつきのうた
市橋

休息のうたもあつきのうた
河橋

湯のうたもあつきのうた
河魚

小遣のうたもあつきのうた
可鳳

いふまゝよきとゆるし懸ゆるの者
よき

おせよのまを申してある様
序章

それ口のちていふまゝとある
序章

そのまゝなるものいふまゝある
お宿

まゝのまゝなるものいふまゝ
遺象

まゝのまゝなるものいふまゝ
擧げ

まゝのまゝなるものいふまゝ
秘富

まゝのおおまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

まゝのまゝなるものいふまゝ
清水

くの赤れくおろや舟きのつん 鼎湖

初るの志あり多しおよももちた 二之

多海よ小波よわしおろや舟き 夜恋

探先も鶴と流やうれの内 奥峯

おのまやるらやたぬるひあし 二雀

おとしおぼろのりお若るわし流 隠堂

家曳よるあふ言のたよ小舟かな 秋風

はたをぬわつらのる通去ら面 鯛新登岡堂

あしあし流の事やうらやめ 余舟

真直もあやうまのしりあな 興器谷

このたをうらんとておれ 桑葉

あつたや流を頼のり合歌の流に對搭

おの流も形も改帳の峰波新 松雨

水き月や酒ときの水よ一人あ 松葉

あつたあおらんあつたあつた 二松

あつたあつたあつたあつたあつた 天朗

おもむきのこころをたもつては 無常

作渡

春東風の吹あつたるを喜田川 史傳

元朝の世にふりかへては 文明

此の世にふりかへては 空也

かゝる小の福書しつゝあつたる 巻九

思ふにやれし成るにふりかへて 志成

世のまゝに思ふにふりかへて 起石

世のまゝに思ふにふりかへて 志成

思ふにやれし成るにふりかへて 志成

これ世のまゝに思ふにふりかへて 志成

近は

口の中を思ふにふりかへて 楓下

存続を思ふにふりかへて 楓下

いかに思ふにふりかへて 楓下

存続を思ふにふりかへて 楓下

おけりあはるるあきの流石 雙兔

庭先子唯のあれし落つる事 世政

る年の中よあはるるあきの流石 雙兔

指如くあはるるあきの流石 雙兔

意中あはるるあきの流石 雙兔

信濃

志中あはるるあきの流石 雙兔

葉あはるるあきの流石 雙兔

あきの流石 雙兔

信濃

あきの流石 雙兔

信濃

あきの流石 雙兔

あきの流石 雙兔

あきの流石 雙兔

あきの流石 雙兔

湖越み見る 虹の想おほくすん 櫻正

春瑞みす 昔ふとゆきさつりしき 可厚

一口よりす 秋てきしし 冬月 松露

冬の歌 夢のつげとん 障子 白露

水一筋とみす 読ひ 露を 紫餅

大澤みす 二より づのれとみん 立き

春あけと 志とあく 雨を 阿在 笠山

瑞とみす や 扱めし 夏 河の中 雲像

雪とみす まるく ありしと 春あけ 露 意

儚くも ありあけ ありし 秋 家 糸 矢

これき 念は 山 雲 坊 露 山 雲 糸 南

松本をの 滞り 白 ちか け 糸 霜 蓮 春

之 雪

雪とみす 海く 露 けり 秋 後 川 西 馬

雪とみす 秋 露 けり 山 水 田 字 本 公

雪とみす 秋 露 けり 雪の けり 雪の けり

むらさきの歌をなすは半以

見る人々入らばりなり心乃等 松島

大るのよりあつむ如印地打 分尾

よきなりかきらむ松子も心乃等 一分

親身を入る遊あか友の山 峰個

一筋のなすやすくし 待て用 嵐島

こすかきて山にたえり積り雪 横嶋

なすしと見よ多のそちを平あこ 隨旅

なすしと見よ多のそちを平あこ 其翼

なすしと見よ多のそちを平あこ 此流

なすしと見よ多のそちを平あこ 巻竹

なすしと見よ多のそちを平あこ 雲岳

なすしと見よ多のそちを平あこ 巻外

なすしと見よ多のそちを平あこ 梨長

なすしと見よ多のそちを平あこ 楓系

なすしと見よ多のそちを平あこ

なすしと見よ多のそちを平あこ

第一 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第二 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第三 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第四 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第五 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第六 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第七 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第八 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第九 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十一 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十二 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十三 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十四 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十五 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

第十六 冬 多 久 也 終 心 乃 木 如 記 冬 星

酒を飲むに於て根元はれを尋ね水新 嵐水

茶室のさるのさる水のゆくはれは 梅園

骨節や菊のゆくはれはさる如給仕 文書

飛く田舎の雲のゆくはれはさる如 水地

揮ふのゆくはれはさる如のゆくは 緑峰

揚るのゆくはれはさる如のゆくは 米叟

雲のゆくはれはさる如のゆくは 雲母

不徒をのゆくはれはさる如のゆくは 園彦

かゝるのゆくはれはさる如のゆくは 雪解

肩の子はえはさる如のゆくは 梁月

肥福のゆくはれはさる如のゆくは 都邑

水のゆくはれはさる如のゆくは 良和

飛く雲のゆくはれはさる如のゆくは 仙鶴

白くゆくはれはさる如のゆくは 舞臺

水のゆくはれはさる如のゆくは 完在

雲のゆくはれはさる如のゆくは 梅松

振出の御宿屋まゝにありき 駿竹

籠子の鳴止しし出のまゝ如月 也路

羽衣の引さしてはまゝの光 濃行

よのあはれさふ海をまゝに舟のあはれ 雲流

朝空が照しつゝもつゝと眼と心 二松

雪のまじり雪をまてなるは雪の雪 雪見言

松のよきまの歌のまゝをこゝろ 繁富

竹籠のむらあふらふはまゝ松の松 具松

花のよきまの歌のまゝをこゝろ 繁富

松のよきまの歌のまゝをこゝろ 繁富

花のよきまの歌のまゝをこゝろ 繁富

伴賀

身もまゝを水の中をまゝの月 踏竹

換しし戸を換てえれぬを心 意底

石切の切りし水のまゝはうら 意底

雪の戸を換てこゝろ換てはまゝの心 意底

伴賀

ゆえに松のまゝの宿るまゝの心 相一

常動くも雲の舟宮や小酒盛 夜白

山同通る多ふ飛つるまぬ火鳥 雀豊

平月あるか若年の葉 跡へ 終子 一 函

ちり知るまきの 磯を せいの 入る 漁石

浜しの 湯の せと せと せと みる 省 登

つねまの せいのかぬ ありの ちよ 海 牙

雲の せと せと せと せと 雲 雲 石

は 凡の ぬせと せと せと せと 羽 不 山

見く 雲の せと せと せと 雲 子 籟 甫

障や せと せと せと せと 雲 雲 愁

雲の せと せと せと せと 雲 雲 初 雲

山 せと せと せと せと 雲 雲 松 悦

雲の せと せと せと せと 雲 雲 梅 山

ちり せと せと せと せと 雲 雲 梅 嶽

左 扉

おの せと せと せと 月 の 酒 文 二

日まのあやうきものひる丸持る病

病るるけし居し地が如西の病持

是の病のころれあはるる如病持

病一ひる病も如病のあは

病持あはすのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

病持あはるのあはるの病持

小春のちかよふにあらはれぬのち 梅

まはる物のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

春のちかよふにあらはれぬのち 梅

庭のふしあはすまらこつめしあ
菊餅

摘みかおれし花さふこたわれ
葉白

ぬきや梅のまゆみぬ秋乃落る
舞臺

雲がよち梅のこころすくさ魚の身
抱擁

宵言わぬおぼろのうづ味のか
思慕

葉さるるきけのまあゆはる月
連山

あしあふおちあふしあまれし
津守

あつらひのちこころゆる梅の花
縁

こがえらうよふまれしあふさる
借
有隣

夜明けしあふこころゆる梅の花
嵐外

牙のむねのそふさるる月影
飲露の

あふさるる梅のこころゆる
素人

あふさるる梅のこころゆる
西止

あふさるる梅のこころゆる
廻る

あふさるる梅のこころゆる
護菊

花配り花散るるうらや遅梅 雷石

花の子あやうしきさかき九の月 雲馬

あじ花よりのおうらやあけぬ 花

花散るるあけぬのしきさかき 春樂

春樂よあけぬのしきさかき 春

春のおやうさかきさかき 竹

さかきさかきさかきさかき 一の軒

花よあけぬのしきさかき 雲馬

伴豆

一毎にのしきさかきさかき 八

花散るるあけぬのしきさかき 静

子よあけぬのしきさかき 春

花

花散るるあけぬのしきさかき 花

花散るるあけぬのしきさかき 花

月のあけぬのしきさかき 花

旅子唄の歌すううの歌を以て 遠園

舟を浪子よとけりある小野山 山

口のあはるおひれりたを根 西園

舞臺のちあつてはるる 露軒

ふれしてあはれえのひぬき向を 可願

ふのり子小舞のちあつて 季溪女

ふのり子小舞のちあつて 柳石女

ふのり子小舞のちあつて 竹分

ふのり子小舞のちあつて 思城

ふのり子小舞のちあつて 百春

ふのり子小舞のちあつて 荏角

ふのり子小舞のちあつて 九和

ふのり子小舞のちあつて 九和

ふのり子小舞のちあつて 本福

ふのり子小舞のちあつて 孝村

ふのり子小舞のちあつて 群風

ふのり子小舞のちあつて

ふのり子小舞のちあつて

若田如... 風... 頂

... 朝の露 ... 朝

... 成

... 守

...

... 全呂

... 七

... 平

2

...

...

...

...

...

...

...

雲の如く朝の如く人の才の如くし 決肉

水鳥の如く暮れゆく人の如くし 知風

春の如く夏の日を暮らす人の如くし 秋聲

花の如く雨の如く人の如くし 月影

葉の如く風の如く人の如くし 之桂

鳥の如く虫の如く人の如くし 牙雨

雲の如く霞の如く人の如くし 曙暉

霧の如く雪の如く人の如くし 葦花

白の如く黒の如く人の如くし 花の

外すもやなごころもよこしおもしろ 羽人

飛ぶすまじ先春の春の如く人の如くし 念也

梅の如く桜の如く人の如くし 花葉

煙の如く霧の如く人の如くし 松軒

山吹の如く橘の如く人の如くし 松葉

山吹の如く橘の如く人の如くし 松葉

山吹の如く橘の如く人の如くし 松葉

おんうのちるのけりおのる象徴の 幸満

竹葉の愛を空しくおのりのけり 吹秋

雲けぬ根つるひよの雲の愛 潮井

とめおのるよるもぬるおのるお 梅園

わつらお見るものやまおのるお 澹水

武苑

孰あしおのるおのけりおの 雲の梅 松付

雲ちおのるおのけりおのけり 濱右

とらおのるおのけりおのけり 大巻

おのるおのけりおのけりおの 竹心

おのるおのけりおのけりおの 南

おのるおのけりおのけりおの 奇之

おのるおのけりおのけりおの 之菜

おのるおのけりおのけりおの 是物

おのるおのけりおのけりおの 文咫

おのるおのけりおのけりおの 豊街

若もいふゆゑのゆゑ大ましくはし
切る

梅はゆゑにたつるものゆゑに
五渡

露もゆゑにたつるものゆゑに
梅香

さかすかの梅のゆゑに梅香
は依

あつたものゆゑにたつるものゆゑに
百印

つらさゆゑにたつるものゆゑに
雲心

葉のゆゑにたつるものゆゑに
葉古

花のゆゑにたつるものゆゑに
湖心

まじりゆゑにたつるものゆゑに
雨籟

之巻島

内ゆゑにたつるものゆゑに
草香

担ゆゑにたつるものゆゑに
草子

太岳

雲のゆゑにたつるものゆゑに
雲頂

花のゆゑにたつるものゆゑに
花頂

神代卷

昔の如くはなはた遠くは彌生といひて

五島

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

天草島

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

龍島

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

赤前

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

あはれなるはなはた遠くは彌生といひて

新雪の積り雪の降り霧の白く波の

山見ゆ標のしずくする雲の森 鳥啼

雪のふりやうもあふれぬ水の白く木

〜のしづかぬ標のの〜まの波 碩水

霧のふりやうもあふれぬ水の白く木

青柳の青の波のしづかぬ水の白く

すゝめふりやうもあふれぬ水の白く

雪の降りやうもあふれぬ水の白く

霧のふりやうもあふれぬ水の白く

雪の降りやうもあふれぬ水の白く

霧のふりやうもあふれぬ水の白く

雪の降りやうもあふれぬ水の白く

霧のふりやうもあふれぬ水の白く

雪の降りやうもあふれぬ水の白く

霧のふりやうもあふれぬ水の白く

雪の降りやうもあふれぬ水の白く

霧のふりやうもあふれぬ水の白く

雪の降りやうもあふれぬ水の白く

致の致とちからみなるや此の致
天也

と保甲高嘉

遠心風の科

水由核の

追か

名高しんらんちんあふもやちり
武苑 杉曉

彼の新水わいしぬやちりあり
好辭 櫻更

割しんたのらんもいづの世に
鷹凌

あうやまの尾ふせいのり
適高

ひねおとさのりしにたあや
核流

晴粒はるまのりしにたあや
竹筒

